

氏名（国籍）	劉 大志（中国）	
学位の種類	博士（芸術）	
学位記番号	甲博第2号	
学位授与年月日	平成22年3月20日	
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当	
学位論文題目	擬態彫刻の研究 - 「埴形」人間の動物的表現 -	
論文審査委員	主査	本学教授 上野 憲 示
	副査	本学教授 小町谷 朝 生
	副査	本学教授 島 野 安 雄
	副査	本学教授 伊 藤 萌 木
	副査	本学教授 上 原 利 丸
	副査	東京藝術大学 布 施 英 利
	副査	

## [ 論文内容の要旨 ]

### 論文構成

第一章 発想

第二章 観察と認識

第三章 制作方法

第四章 完成作品

第五章 歴史的な人間の動物的彫刻作品を分析

第六章 結語

2007年、文星芸術大学の入学当時から地球的、宇宙的原理を思考の原点として、無意識的、無重力的等、新たな表現の場を考えて研究した。そして、自分の作品の独自性、新規な表現形式は現代作家の求めるところである。その考えに立つことによって自分の作品は基礎造形から個性の表現に変化し研究し展開してきた。私は創造力、表現力やその他の発

想力等を持って新しい視覚革命と造型芸術の新たなる世界を模索し、主に粘土を中心に制作することを自分の新しい方法と定めた。

擬態とは生物や人間が、その色彩や形、行動によって周囲の環境(地面や植物、他者等)と容易に見分けがつかないような効果を上げること、カモフラージュとも言う。進化によってある特定の環境に似た外見を獲得して擬態するもの(昆虫類など)と、自分の外見を変化させる能力を獲得して擬態するものがある。「擬」は模倣を意味し、「態」はかたち、すがたを意味する。私の「擬態」とは形体におけるの同一化、ないし人間の形体と動物の形態を模倣する類似化のことであり、すなわち「人間の動物的表現」と言える。人間と動物の形を融合した立体造形であり、視覚的に人間の容姿で、動物的な形・行動を中心とした感情や意識等を表現することである。

研究の主要目的は、動物の情感や形態等から感じるものを中心として、人体制作形式の分析を基に、特に塑造による「埴形」形式に関する解釈、説明等が中心である。

本論において、人間の動物的表現は、人間中心社会から生物全般にわたる自然力への思考の発展と、更には原点へと視点を変える。私はここで【埴形】と言う新造語を提案しておきたい。

私のテーマとする人間の動物的な表現では、人間の内面を重視する。動物の一種である人間の内面には、野性や素朴さや自然の摂理による多様な内面性の混ざり合いが見出される。つまり人間には他の動物との同一性が多く含まれる。人間の感情を自然界の原始の状態に回帰し、動物の形態を通じて人間の根原的要素の表現も可能だと考えてきた。こうして自然の摂理における生物一般にまで考えを拡張したことで、新しい内容を展開し得たと確信している。

私の研究内容については、人間と動物の感情、形体、運動学、解剖学、彫塑の要素、力学原理等の各項を通じて論述する。特に観察、発想、感覚、意識及制作手段、あるいは擬態彫刻作品の歴史的展開の表現形式、並びに人間と動物の形体を結び付ける実験内容については、自作「空」及び作品数点を参考に示し論考する。

第一章は、制作の価値、思惟及び「人間と動物の欲望」と「中国の武術と彫刻」を論述する。第二章は、「感情」、「人間と動物の形体」、「形体の運動及解剖学」の各項を通じて論述する。第三章は、「テラコッタの制作過程」と「制作の造形要素」である。「制作の造形要素」の中に基本要素と表現要素を述べる。第四章は、自作「空」及び作品数点を示し述べる。第五章では、歴史的な人間の動物的彫刻作品を分析する。

最後に、自分の視点で日本の彫刻を述べる。作品を言葉によって把握し直すことは、今後の制作研究に役立つことが多々ある。私はテラコッタによる制作を基本的な造型手段として、その原点から表現意識と表現方法を拡充し、歴史、民族、国境を越えて、彫塑の内在性と表現性を豊かにすることを探求していく。今後は、自然素材と合成素材を用いて新しい表現方法を確立したい。

## [ 審査結果の要旨 ]

劉大志君提出の学位請求論文は、作品「擬態人間」における創作の発想、ならびにその背景理論の説明を内容とするものである。

中国出身の彼は、動物と同位体化する人間を、さまざまな動物とそれらがとる固有のポーズにおいて表現することを研究科在学期間の主要テーマと定めて、多様な角度からの研究を試行してきた。当論文に置かれる主幹テーマはそれの一つである。

彼はそれを擬態と表現する。擬態は日本では生物学の一用語であり、それは昆虫が捕食動物の眼を逃れるために用いる、居留する樹木の枝葉にその姿態を近似させるなどのカモフラージュを意味する。著名なその例は、樹木の小枝に似る姿態をとるナナフシである。

劉君における擬態は、体形においての同一化ないし類似化の内容を持つことを意味し、彫刻ジャンルにおいて独自の用語として定義を与えられている。そのような見方は、わが国の伝統にはなくきわめて中国的発想に立つ、独自性の強いものといえる。

動物を人間と同位化する見方は、管見において欧米において先例がない。欧米の倫理観は、極端にはダーウィンの進化論さえも拒絶する地域があるほどに、人間と動物とを頂点とする階位ランクを以て区別する見方が存在する。それは文明社会樹立による教義的意識に基づく結果であるが、狐の嫁入りや鶴の恩返しを許容するわが国にはそれほどに強固な見方は無かった。しかし、人間と動物の垣根を撤去する見方は消極的であり、これまでのところその捉えに関係づけられるわが国における文献は、中沢毅一『人間動物学』（裳華房、大正13年）ぐらいと思われる。その書においても、生物学の眼で動物を観察し、その諸器官の活動のごく一部を人間の説明に適用するという範囲での所見にとどまる。

しかし、中国文化における事情は完全に別であり、諸動物は神仙の使いとしての位置づけから、より直接的かつ具体的に人間社会と接触する。それにより、一部の動物は人間に対して上位からの接触資格を与えられることにすらなる。一方、中国伝統の拳法においては、さらに直接に捕食のさまが、その闘いの型として動物の名称を以て登場している。それらを認める社会的な感覚において、動物は人間のごく近いものあるいは同体化しうるものとして存在する。

劉君の作品創作の視点は、まさにそのような中国の文化的特質である動物親近性を背景場とするものであり、その創作姿勢において既に独自のものである。また、そのような作品制作に関わる思考の立場を、造形面からだけではなく、哲学的な論点においても説明することを試みてみている。その広い場からの発言姿勢は、きわめて説得的である。

劉君の創作姿勢と作品を解説する当論文は、日本語を母国語としない留学生一般に見られる

共通の言語表現の弱点を一部にもつが、独立の論文として必要な内容の伝達には事欠くことのない表現力をもつものであり、十分明確に博士の学位請求論文の資格をもつといえる。よって、本審査会は、学位授与を認めるものである。